広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	活動報告
Author(s)	西口，光一；石原，淳也；恒松，直美；荒見，泰史；迫田，久美子；陳，斐寧；小宮山，道夫
Citation	広島大学留学生教育 , 27 : 79 - 120
Issue Date	2023-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054876
Right	
Relation	

日本語研修コース

西口光一

本年度は、第 73 期及び第 74 期の日本語研修コースを実施した。本年度は大きなカリキュラム改革を行った。

Ⅰ では、コースの概要を報告し、Ⅱ では新しいカリキュラムと学習と教育の実践について論じる。

Ⅰ．各コースの概要

□ 第 73 期日本語研修コース

１．期間　2022 年５月～９月

２．在籍学生数　６名

３．担当教員

(1) コーディネータ　西口光一

(2) 専任教員　フェレイロ・ダマソ、松山由布子、陳斐寧

(3) 客員講師　佐藤道雄、中川正弘、山中康子、渡辺久美

４．コース・カレンダー

2022 年

５月６日（金）14:00～15:00　オリエンテーション

５月６日（金）13:30～14:00　開講式

５月 10 日（火）～９月 16 日（金）授業期間

*授業開始が１カ月遅れたため、その分の授業期間延長をしている。

８月 15 日（月）～８月 26 日（金）夏季休業

９月 16 日（金）12:50～14:20　成果発表会

９月 16 日（金）14:30～15:00　修了式

５．研修旅行

６月 24 日（金）　広島

９月９日（金）　マツダミュージアム

６．カリキュラム

３月末の時点で国費研究留学生の４月渡日が見込まれなかったので、日本語研修コースの開始を５月大型連休明けとすることを決定した。しかし、学生たちがそろうまでにはさらに時間がかかり、以下のように５月中はオンラインでの授業実施とし、６月から対面授業を開始した。

⑴ ５月 10 日（火）～５月 31 日（火）

渡日ができずそれぞれの国にいる国費研究留学生を対象として、オンラインでの授業を開始した。時差の関係で、午前グループと午後グループの２グループ制でオンライン授業を実施した。

⑵ ６月１日（水）～

対面授業を開始した。週間の授業スケジュール例は以下の通り。

Week ６： 6/13-17

	M	T	W	Th	F
Ⅰ 9:30 | 10:15	Work Session - Working on Unit８ essay	Work Session - Unit８のessay sharing	Work Session - Working on Unit９ essay	Work Session - Unit９のessay sharing	Work Session - Working on Unit１０ essay
	まつやま	まつやま	まつやま	まつやま	やまなか
Ⅱ 10:30 | 12:00	□ Unit９ - Words and expressions on “What I want to do”(Unit９) - Announcement of the Mid-term exam and Hiroshima field trip	□ Unit９ Narrative B - 1	□ Unit１０ - Words and expressions on “Rules and Directions”(Unit 10)	□ Unit１０ - Review - Additional Practice (2) pp.137-138 - WPS	- Review and Consolidation - Inflection of inflectional verbs cf.p.168 *Invitation to host family program
	にしぐち	ちん	にしぐち	ちん	にしぐち
Ⅲ 12:50 | 14:20	□ Unit９ Narrative A - 1	□ Unit９ Narrative B - 2 - Oral activity for essay writing - GPS - WPS	□ Unit１０ Narrative １＆２	□ Unit１０ - Oral activity for essay writing - GPS	□ Unit１１ Narrative １＆２
	わたなべ				
Ⅳ 14:35 | 16:05	□ Unit９ Narrative A - 2				
	なかがわ	ダマソ	さとう	ダマソ	わたなべ
		☆Homework Essay, GPS, WPS of Unit９		☆Homework Essay, GPS, WPS of Unit１０	

図１　対面授業期間の週間の授業スケジュールの例

７．学生リスト

学生（記号）	国籍	身分	進学先（見込み）/所属	専門
A	インドネシア	日本語等予備教育生 (研究留学生)	医系科学研究科	医歯学
B	パプアニューギニア	日本語等予備教育生 (研究留学生)	人間社会科学	社会科学
C	パレスチナ	日本語等予備教育生 (研究留学生)	統合生命科学研究科	医歯学
D	カーボベルデ	日本語等予備教育生 (研究留学生)	医系科学研究科	医歯学
E	タンザニア	日本語等予備教育生 (研究留学生)	医系科学研究科	医歯学
F	南スーダン	日本語等予備教育生 (研究留学生)	医系科学研究科	医歯学

□ 第 74 期日本語研修コース

１．期間　　2022 年 10 月～2023 年３月

２．在籍学生数　20 名

３．担当教員

(1) コーディネータ　西口光一

(2) 専任教員　　フェレイロ・ダマソ、松山由布子、陳斐寧

(3) 客員講師　　佐藤道雄、中川正弘、山中康子、渡辺久美

４．コース・カレンダー

2022 年

10 月６日（金）11:00～12:00	オリエンテーション
10 月６日（金）13:30～14:00	開講式
2022 年 10 月７日（金）～2023 年２月 27 日（月）	授業期間
2022 年 12 月 26 日（月）～2023 年１月５日（木）	冬季休業
2023 年３月１日（水）10:00～14:30	成果発表会
９月 16 日（金）14:30～15:00	修了式

５．研修旅行

2022 年 10 月 28 日（金）　広島

2022 年 11 月 25 日（金）　宮島

2023 年１月 13 日（金）　マツダミュージアム

６．カリキュラム

以下に、週間の授業スケジュール例を挙げる。

この学期は、在籍学生が 20 名とひじょうに多かったため、午前は１クラス体制で、そして、午後は授業と課題学習の並行２クラス体制で授業を実施した。スケジュールの中の「Independent Study（個別学習）」と「Workshop」は課題学習の時間で、学生はその時間中に与えられた課題を学習し、授業後に提出する。そして、もう一方のクラスは教師による授業。

Week ３： 10/17-21

	M		T		W		Th		F	
Ⅰ 9:30 | 10:15									・Reproduction Check ・Essay Sharing ・Writing and Recognition Practice やまなか　@Ｋ２０９	
Ⅱ 10:30 | 12:00	Lecture Unit３　My favorite things すきなもの、すきなこと にしぐち　@Ｋ２０９		□　Unit３ Narrative Ａ－２ Ａ：チン/Ｂ：まつやま		Review にしぐち　@Ｋ２０９		□　Unit３ Narrative Ｂ－３ Ａ：チン/Ｂ：まつやま		Lecture Unit４　My everyday life Ａ わたしの一日(いちにち) にしぐち　@Ｋ２０９	
Ⅲ 12:50 | 14:20	A □Unit３ NarrativeA-1 わたなべ	B Independent Practice	A □Unit３ NarrativeB-1	B Workshop ・WPS３	A Workshop ・GPS３	B □Unit３ NarrativeB-2	A □Unit３ Activities for writing Essay	B Independent Practice	A Workshop ・Working on Unit３ Essay	B □Unit４ NarrativeA-1
Ⅳ 14:35 | 16:05	Independent Practice なかがわ	□Unit３ NarrativeA-1	Workshop ・WPS３ ダマソ	□Unit３ NarrativeB-1	□Unit３ NarrativeB-2 さとう	Workshop・ GPS３	Independent Practice ダマソ	□Unit３ Activities for writing Essay	□Unit４ NarrativeA-1 わたなべ	Workshop ・Working on Unit３ Essay

☆Unit３ Essay, due on Sunday.

図２　週間の授業スケジュール例

７．学生リスト

学生（記号）	国籍	身分	進学先（見込み）/所属	専門
A	コロンビア	日本語等予備教育生 (研究留学生)	統合生命科学研究科	工学
B	イラク	日本語等予備教育生 (研究留学生)	先進理工系科学研究科	工学
C	チュニジア	日本語等予備教育生 (研究留学生)	先進理工系科学研究科	工学
D	カンボジア	日本語等予備教育生 （教員研修）	人間社会科学研究科	教職開発
E	フィリピン	日本語等予備教育生 （教員研修）	人間社会科学研究科	理科教育
F	アルゼンチン	日本語等予備教育生 （教員研修）	人間社会科学研究科	教職開発
G	ジンバブエ	日本語等予備教育生 （教員研修）	人間社会科学研究科	特別支援教育 （インクルーシブ教育）
H	インド	博士課程前期	先進理工系科学研究科	機械工学
I	インド	博士課程前期	先進理工系科学研究科	機械工学
J	ベトナム	博士課程前期	先進理工系科学研究科	機械工学
K	マラウイ	日本語等予備教育生 (研究留学生)	先進理工系科学研究科	工学
L	モザンビーク	日本語等予備教育生 (研究留学生)	統合生命科学研究科	農学
M	ルワンダ	日本語等予備教育生 (研究留学生)	先進理工系科学研究科	理学
N	ナイジェリア	日本語等予備教育生 （教員研修）	人間社会科学研究科	幼児教育学

O	ナイジェリア	日本語等予備教育生（教員研修）	人間社会科学研究科	教育心理学
P	マラウイ	日本語等予備教育生（教員研修）	人間社会科学研究科	生物学
Q	インド	博士課程前期	先進理工系科学研究科	機械工学
R	インドネシア	博士課程前期	先進理工系科学研究科	化学工学
S	バングラデシュ	博士課程前期	先進理工系科学研究科	社会基盤環境工学
T	中国	博士課程前期	先進理工系科学研究科	機械工学

Ⅱ．新しいカリキュラムと学習と教育の実践

１．新しいカリキュラム

これまでのカリキュラムは、オーソドックスな文型・文法事項積み上げ方式のカリキュラムで、同学習と並行して基礎語彙を習得することを趣旨としていた。そして、コースの後半ではそれまでに身につけた日本語の知識を基礎として、話す、聞く、読む、書くという日本語の技能を育成しようとするものであった。しかし、こうしたカリキュラムでは以下のような課題がある。

1) 日本語教育の最初の段階は日本語の基礎力を育成すべき段階である。しかし、オーソドックスな日本語教育はそのようになっておらず、基本的な言語事項を教授し、その後に技能を養成するというアプローチになっている。そうしたアプローチの教育課程では基礎日本語力を有効に身につけさせることができないことが従来より指摘されている。本コースのこれまでのカリキュラムもそのようなオーソドックスなアプローチに基づく教育課程となっていた。
2) こうしたカリキュラムでは「一時に、一つの文型・文法事項を学習する」という文型・文法事項積み上げ方式となっており、当該の課でその課の文型・文法事項を習得できないと、多くの場合に以降の課の学習が困難になる。
3) 語彙が体系的に習得できるように教育が企画されていない。
4) カリキュラムにこうした課題があるために、着実な日本語の基礎力の育成が困難である。

一方で、最近になって、新たな習得の原理に基づく自己表現活動ベースとした話題中心の基礎日本語教育の方法が提案されている。自己表現活動中心の基礎日本語教育（以下、自己表現の日本語教育と略す）である。そして、同教育を支える教材も入手可能になり、同教育の実践も報告されている。

自己表現の日本語教育では、各ユニットでは自己表現をめぐる話題が設定されて、その話題について話す、聞いて理解する、相互行為することが目標として設定されている。そ

して、一連のユニットの学習を通して、文型・文法事項を系統的に習得し、基礎語彙を体系的に身につけられるようになっている。

日本語研修コース担当教員は、自己表現の日本語教育に注目し、学生の渡日が遅れている４月から５月にかけて、同カリキュラムと教育方法を研究し、また相互学習会や研修会を実施して、同教育を実践することとした。そして、同教育を支える『NEJ ― テーマで学ぶ基礎日本語』（くろしお出版）を新たな教科書として採用した。

２．授業スケジュール

これまでのコースでは、各曜日・時限で、文型・文法事項導入、練習、会話、読解など授業担当の学習課題が決まっていた。自己表現の日本語教育では、そのようにはせずに、18 週間の各授業の内容を連続的に計画した。ただし、各ユニットの授業の流れの基本は以下の通りである。

話題についてのナラティブの学習

↓

重要な文型についての自覚的な練習

↓

重要な漢字についての学習

↓ *この部分は入門期は、ひらがなやカタカナなどの学習となる。

ペアワークなどでの話題についての表現活動練習

↓

話題についての自分の話のエッセイの宿題

↓

＜教師によるエッセイの添削＞

↓

各自エッセイの確認後、読み聞かせ合いによるエッセイの交換

自己表現の日本語教育では各ユニットで、学生は教科書を予習や復習やエッセイ作成のために活用し、教師は教科書を授業活動で活用しながら、ユニットの話題をめぐる日本語力を育成することがもくろまれている。

３．教育実践

このように各ユニットの目標が「できるようになること」として明確に設定されている自己表現の日本語教育では、学生が日本語学習の主役となる。そして、学習の主役となった学生は各ユニットの目標を達成するべく主体的に学びに取り組む。教師は、主役の立場

から離れ、主役となって目標を達成しようと努力している学生を支援し日本語を促進するサポーターとなる。そうした形で、上記の２つのコースは実施された。

第 37 期（2021 - 2022）
日本語・日本文化研修プログラム

石原淳也

＜プログラム概要＞

本プログラムは、森戸国際高等教育学院（2010 年に旧留学生センターから国際センターへ、その後 2018 年に森戸国際高等教育学院へ改組）で受け入れる大使館推薦による「日本語・日本文化研修プログラム」研修留学生を中心に、大学間協定に基づき教育学部、総合科学部、文学部等で受け入れられている「日本語・日本文化研修プログラム」研修留学生を対象に加え、(1) 全学の留学生向けの「日本語・日本事情」で開設されているクラスから選択履修する「日本語研修」、(2) 学内、学外の講師による特別講義および文化施設・文化財等の見学などからなる「日本語・日本文化特別研究 I, II」、そして (3) 指導教員のもとでの「個別指導および課題研究」の三つの内容により構成されており、石原淳也（森戸国際高等教育学院准教授）が 1 人で担当している。

研修生は「個別指導および課題研究」での研究経過を「日本語・日本文化特別研究 I, II」の時間中に構想発表および中間発表として発表するとともに、修了式の前に行われる研修成果発表会においてその研究の成果を発表し、指導教員と森戸国際高等教育学院にレポートを提出する。森戸国際高等教育学院では毎年これらをまとめて研修レポート集として刊行している。

＜受け入れ学生の概要＞

第 37 期は大使館推薦の配置はなく、部局間協定に基づく大学推薦による教育学部受け入れのニュージーランドの学生 1 名のみでプログラムを実施した。

＜新型コロナウイルス感染症の影響＞

2020 年 2 月にクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号内で多数の感染者が出て以来、コロナの影響は当該学生の受け入れから修了まで深い影を落とすこととなった。

例年、本プログラムに参加する学生は後期からの受け入れとなるため、10 月初旬に渡日することになっているが、今回はコロナ禍での混乱や政府による外国からの渡航制限の影響で学生の渡日が特に遅れ、本年度の学生が広島に到着したのは年をまたいだ 3 月初旬であった。

森戸で開設されている「日本語･日本事情」については、渡日前はオンラインで実施、渡日後の 22 年度前期も見学以外は基本的にオンラインで授業を行うこととなった。

「日本語・日本文化特別研究」に含まれる見学は、当然のことながら 22 年度前期に詰め込んで実施することとなった。しかし、状況が改善しつつあったとはいえ、コロナ以前に実施していた日帰りの見学は全て実施することができず、しまなみ海道と愛媛県の松山をバスで巡り、フェリーを使って帰ってくる一泊の「瀬戸内海しまなみ研修ツアー」、島根県松江市、出雲市を巡るこれも一泊の「古事記の旅」見学旅行も、ともに実施することはできなかった。

また、修了式、成果発表会は学生の希望で中止とした。

＜特別講義等＞

2021 年度（第 37 期）に実施した日本語・日本文化特別研究、および、その他の行事は、以下の通りである。

		（担当者）
10 月		
6 日	開講式（オンライン）	
8 日	オリエンテーション	石原
15 日	言語学の基礎 1	石原
22 日	言語学の基礎 2	石原
29 日	言語学の基礎 3	石原
11 月		
4 日	言語学の基礎 4	石原
12 日	言語学の基礎 5	石原
19 日	特別講義「日本語における文法の記号学」	中川
26 日	言語学の基礎 6	石原
12 月		
3 日	言語学の基礎 7	石原
10 日	休講	
17 日	言語学の基礎 8	石原
24 日	音声学入門 1	石原
1 月		
14 日	音声学入門 2	石原

	21 日	音声学入門 3	石原
	28 日	音声学入門 4	石原
2 月			
	4 日	休講	
3 月			
		瀬戸内海しまなみ研修ツアー	中止
4 月			
	15 日	研修レポート構想発表	石原
	23 日	尾道見学	石原
5 月			
	13 日	特別講義「明治までの政治と経済 1」	石原
	20 日	特別講義「明治までの政治と経済 2」	石原
	27 日	休講	石原
6 月			
	3 日	宮島見学	石原
	10 日	特別講義「語用論となわ張り理論 1」	石原
	17 日	特別講義「語用論となわ張り理論 2」	石原
	24 日	特別講義「古事記と出雲神話 1」	石原
7 月			
	1 日	特別講義「古事記と出雲神話 2」	石原
	8 日	特別講義「古事記と出雲神話 3」	石原
	15 日	特別講義「日本語教育 1」	石原
	22 日	特別講義「日本語教育 2」	石原
		松江・出雲見学旅行	中止
8 月			
	5 日	研修レポート中間発表	石原
9 月			
		修了式	中止
		研修成果発表会	中止

日本語教育部門：日本語・日本事情

２０２２年４月～２０２３年３月

石原淳也

授業科目一覧

・東広島キャンパス　　1コマ（2時限）90分

日本語・日本事情科目 （学部生対象） 週2コマ／8週／1単位	開設ターム 受講登録者数（非正規受講の大学院生・研究生を含む）			
	1	2	3	4
日本語入門Ａ－１	23		42	
日本語入門Ａ－２		20		35
日本語入門Ｂ－１	21		39	
日本語入門Ｂ－２		17		28
日本語初級Ａ－１	11		16	
日本語初級Ａ－２		20		15
日本語初級Ｂ－１	22		11	
日本語初級Ｂ－２		20		12
日本語中級Ａ－１	25			
日本語中級Ａ－２		23		
日本語中級Ｂ－１	10			
日本語中級Ｂ－２		7		
日本語中級Ｃ－１			18	
日本語中級Ｃ－２				18
日本語中級Ｄ－１			13	
日本語中級Ｄ－２				13
日本語中上級Ａ－１	18			
日本語中上級Ａ－２		15		
日本語中上級Ｂ－１	19			
日本語中上級Ｂ－２		14		
日本語中上級Ｃ－１			13	
日本語中上級Ｃ－２				13
日本語中上級Ｄ－１			24	
日本語中上級Ｄ－２				20

＊共創学科生は「教養教育ベーシック日本語」として受講

日本語・日本事情科目 （学部生対象） 週2コマ／8週／1単位	開設ターム 受講登録者数（非正規受講の大学院生・研究生を含む）			
	1	2	3	4
日本語上級聴解Ａ		12		
日本語上級聴解Ｂ				3
日本語上級分析Ａ	11			

日本語上級分析Ｂ			9	
論文作成法Ａ		9		
論文作成法Ｂ				4
日本語上級語彙Ａ	10			
日本語上級語彙Ｂ			4	
日本語上級映像Ａ		7		
日本語上級映像Ｂ				4
ビジネス日本語Ａ	15			
ビジネス日本語Ｂ			5	
日本語・日本文化特別研究A-1			1	
日本語・日本文化特別研究A-2				1
日本語・日本文化特別研究B-1	1			
日本語・日本文化特別研究B-2		1		

・霞キャンパス

教養教育ベーシック日本語科目 （学部生対象） 週2コマ／8週／1単位	開設ターム 受講登録者数（非正規受講の大学院生・研究生を含む）			
	1	2	3	4
日本語入門１	6		15	
日本語入門２		6		16
日本語初級１	5		10	
日本語初級２		5		10

日本語教育部門:留学生関係科目

2022年4月～2023年3月

石原淳也

特別聴講学生日本語科目 （交換留学生対象の一般科目） 週2コマ／8週／２単位	開設ターム 受講登録者数			
	1	2	3	4
Introductory Japanese A-1			9	
Introductory Japanese A-2				7
Introductory Japanese B-1			9	
Introductory Japanese B-2				7
Elementary Japanese A-1	3		17	
Elementary Japanese A-2		4		16
Elementary Japanese B-1	4		15	
Elementary Japanese B-2		5		14
Intermediate Japanese A-1			11	
Intermediate Japanese A-2				12
Intermediate Japanese B-1			20	
Intermediate Japanese B-2				18
Intermediate Japanese C-1			12	
Intermediate Japanese C-2				12
Intermediate Japanese D-1	11			
Intermediate Japanese D-2		10		
Intermediate Japanese E-1	8			
Intermediate Japanese E-2		8		
Intermediate Japanese F-1	6			
Intermediate Japanese F-2		5		
Upper-Intermediate Japanese A-1			29	
Upper-Intermediate Japanese A-2				26
Upper-Intermediate Japanese B-1			28	
Upper-Intermediate Japanese B-2				15
Upper-Intermediate Japanese C-1			27	
Upper-Intermediate Japanese C-2				20
Upper-Intermediate Japanese D-1	18			
Upper-Intermediate Japanese D-2		9		
Upper-Intermediate Japanese E-1	13			
Upper-Intermediate Japanese E-2		6		
Upper-Intermediate Japanese F-1	15			
Upper-Intermediate Japanese F-2		7		
Advanced Japanese Listening A-1	9			
Advanced Japanese Listening A-2	9			
Advanced Japanese Listening B-1			12	

Advanced Japanese Listening B-2			12	
Advanced Japanese Analysis A-1		4		
Advanced Japanese Analysis A-2		4		
Advanced Japanese Analysis B-1				11
Advanced Japanese Analysis B-2				11
Academic Writing A-1	4			
Academic Writing A-2	4			
Academic Writing B-1			16	
Academic Writing B-2			16	
Advanced Japanese Vocabulary A-1		1		
Advanced Japanese Vocabulary A-2		1		
Advanced Japanese Vocabulary B-1				9
Advanced Japanese Vocabulary B-2				9
Advanced Japanese Cinema A-1	8			
Advanced Japanese Cinema A-2	8			
Advanced Japanese Cinema B-1			8	
Advanced Japanese Cinema B-2			8	
Business Japanese A-1		3		
Business Japanese A-2		3		
Business Japanese B-1				14
Business Japanese B-2				14

短期交換留学生等の日本事情教育・地域連携による国際的体験学習

恒松直美

本報告では、主に広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program、HUSA プログラム）と総合科学部国際共創学科（Department of Integrated Global Studies）の学生に向けて実施した日本事情教育及び地域と連携した国際的体験学習・国際教育について報告する。英語で行う授業、地域学校との国際教育交流、地域行政と協同するインターンシップなど、多国籍留学生と本学学生の国際共修及び学術知と実践知をつなぐアクティブ・ラーニングの発展について述べる。

1993 年に日米文化教育交流会議（The United States - Japan Conference on Cultural and Educational Interchange：通称カルコン CULCON）が開催され日米間の学生交流の促進が謳われ、政府支援の下、1995-96 年に 8 国立大学が短期学生交流プログラムを開始した。広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program、以下 HUSA プログラム）は、その 8 国立大学の 1 つとして 1996 年に開始され、積極的に学生交流を促進してきた。その経緯から、当初の本学の短期交換留学プログラムは、米国の高等教育機関との交流を中心とするものであった。その後、プログラムは徐々に拡大し、現在は、世界中に点在する協定大学 115 大学及び 2 コンソーシアム（University Studies Abroad Consortium、USAC 及び University Mobility in Asia and the Pacific、UMAP、アジア太平洋大学交流機構）と協定を締結し（2023 年 6 月時点）、交換留学生受入れ・派遣留学を発展させてきた。交換留学生の日本への交換留学の主な目的は、日本語能力習得と日本文化体験、日本と関わるキャリア構築の模索、新たな自己発見である。**2022-2023 年度 HUSA プログラム受け入れ**は 46 名であった。そのうち、21 名が 2022 年度秋学期のみの 1 学期間参加し、25 名が 1 年間参加した。2023 年 4 月からの春学期受け入れでは、5 名が一学期間参加した。2022-2023 年度は、通常通り 9 月に渡日することが可能となった。

2022-2023 年度 HUSA プログラム派遣留学に関しては、1 次募集と 2 次募集を行った。1 次募集については、2022 年 1 月上旬に応募者の選考を行い、2022 年 2 月下旬のグローバル化推進部会で 71 名の派遣が承認された。2 次募集では 2022 年 7 月に選考を行い、2022 年 8 名の派遣が承認された。さらに、2022 年 3 月の部会で追加 1 名の承認があった。

国際共創学科（Department of Integrated Studies、IGS）は、2018 年に新設された。世界中から集まった学生が一緒に学び、文化間のコミュニケーション能力、互いの相違を認め合う寛容性、国際舞台で求められる多角的視野と思考力と協調性を身に付けることを目的と

している。国際共創学科の学生は、「文化と観光」、「平和とコミュニケーション」、「環境と社会」の 3 つの視点から学ぶ。現在、広島大学では、プログラムの枠を超え、全学の学生が共に学ぶ場が構築されつつある。筆者が HUSA プログラムの交換留学生向けに開講した日本事情や国際的体験学習の授業を、現在ではプログラムの枠を超え様々な学生が受講している。”Glocal Internship”（「グローカル･インターンシップ」、森戸国際高等教育学院開講）、“Japanese Society and Gender Issues”（「日本社会とジェンダー」、森戸国際高等教育学院開講）、“Intercultural Competence and Japanese Society”（「異文化間能力と日本社会」、森戸国際高等教育学院開講）、「異文化間理解の社会理論と実践」（大学院人間社会科学研究科開講）の授業において、大学教育と地域社会を連携させ、本学学生と留学生が地域学校や地域行政と関わりつつ国際共修する場を構築している。本報告では、様々な日本事情と国際教育の授業の発展について振り返る。

◆　日本の地域社会の文化・歴史見学

2003 年からコロナ禍の前の 2019 年まで、毎年 10 月に HUSA プログラム留学生向けに広島県呉市吉浦秋大祭見学を行い、日本文化の体験学習の機会を提供してきた。日本の地域に伝わる祭りの歴史と地域社会の組織や活動について学ぶとともに、広島大学への到着とオリエンテーションの直後から学生間の交友関係を構築し、地域の人々と交流する場として意義ある文化体験の場となってきた。祭りの場では、毎年、バスからおりる留学生と握手したり話しかける地域の人々の姿があり、一緒に写真撮影をする姿が恒例となっている。また、地域の方から留学生にはちまきを提供するのが慣例となりつつある。地域の人々による留学生の暖かい歓迎は、広島大学に到着したばかりの留学生にとり、日本での新しい生活の門出を同じ留学生の仲間・教員・地域の人々とともに祝う場ともなってきた。また、地域の人々にとっても、世界各国からの留学生との出会いの場となってきた。

◆「グローカル・インターンシップ」：地域社会との連携による国際的体験学習

2003 年度から 2011 年度まで、春学期に「HUSA インターンシップ」コースを開設して以来、毎年春学期に HUSA プログラム留学生の受講生を地域企業と東広島市役所に 2 週間派遣した。2005 年度よりインターンシップ派遣前に事前研修を開始し、留学生が日本社会の慣習や礼儀を理解したうえでインターンシップに参加する体制を充実させた。2010 年度前期より企業体験者を招聘して全学公開セミナーを開催し、留学生が本学学生と共に国際的視野から将来のキャリアと留学を考える機会を作った。また、2010 年度後期からは社会体験者講話に基づいた PBL（課題発見解決型学習法）による留学生と本学学生の協同学習も導入し、学生のグローバルな視野からのアクティブ･ラーニングの場を構築した。

2012 年度秋学期からは、「グローバル化支援インターンシップ I : キャリア理論と実践」・「グローバル化支援インターンシップ II : 実習」と題し、新しく「学生主導型」の交換留学生向けインターンシップの授業を開講した。地域の国際観光振興や多文化共生の地域づくりに貢献しつつ日本社会について学ぶことを目指し、留学生の国際的体験学習の企画や、地域の小学校・中学校・高校における国際交流も企画した。「派遣型」から「学生主導型」へと新しくパラダイム転換を図ったプロジェクト型「グローバル化支援インターンシップ」では、留学生の持つ日本文化の概念的知識を地域と協働して実践知として生かし、体験から学ぶ国際的体験学習の場を構築した。留学生がリーダーシップを発揮しつつ自らマネージメントを行うプロジェクトは、留学生に多角的な学びをもたらしてきた。

2019 年度より「グローカル・インターンシップ I : キャリア理論と実践」・「グローカル・インターンシップ II : 実習」と題して開講している。2014 年頃より地域行政との連携をより強化し、留学生が日本の地域社会と連携し協働する力を育成しつつ地域国際化を促進するプロジェクト型インターンシップを発展させた。地域行政の協力を得て、2015 年から 2020 年まで、毎年 2 月に、担当教員の指導のもと、留学生インターンが呉市倉橋町で開催される「倉橋フェスティバル」に参加し、国際交流企画を提示し、地域の人々と交流した。その実践に向け、毎年 11 月に『「地域と大学が協働で創る多文化共生社会」公開国際セミナー』を広島大学で開催し、呉市行政関係者より企画の承認と助言を得てきた。セミナーには、呉市産業部観光振興課、呉市倉橋町の観光ボランティアガイドの会、倉橋町自治会、呉市議会、などの行政関係者を招聘し、地域社会の課題について学ぶとともに、留学生インターンによる国際交流企画のプレゼンテーションを行ってきた。訪問者 12, 000 人と言われる商業祭「倉橋フェスティバル」において、地域住民と留学生の交流の場をインターンの企画により実現する貴重な実践学習の場となってきた。継続して実施したことにより、呉市行政及び倉橋町の関係者からの協力は毎年強化され、恒例の行事として、地域住民からの支持の輪が広がっていった。

2021 年度は、新型コロナウイルス感染症の状況に鑑み、秋学期の時点では、留学生の日本への入国が許可されていなかったため、本授業はオンラインで実施した。倉橋フェスティバルが中止となったため､代替の企画として 2022 年 1 月に呉市立倉橋中学校との国際交流をオンライン実習として実施した。「広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）留学生インターンと呉市立倉橋中学校との国際交流会」と題し、受講生のタイ・中国出身の留学生が中学校とのオンライン国際教育交流を企画し実施した。実習では、タイと中国の文化を紹介するとともに、留学生の母国に関するクイズを出題し、中学生との異文化間インタラクションを起こす実践を行った。本実習の実現に向け、2021 年 12 月に、呉市行政の協力を得て「地域と大学が協働で創る多文化共生社会」地域公開国際セミナーをオンラインで開催した。地域行政関係者より示唆を得た。また、過去に実習を体験し、現在日本で就労している OB インターン留学生（韓国出身）もオンラインで招聘し、インターンシップの体験が自身のキャリアに与えた影響ついて体験談を聞いた。現在 JET プログラムの ALT（Assistant Language Teacher）として沖縄で勤務するアメリカ人の OB インターン留学生（HUSA プログラム 2019-2020 年度参加）も参加した。さらに、本セミナーには、留学生との異文化間教育の共修の導入を検討する広島県の高等学校の教員の参加もあった。

2022 年度からは、新たに “Glocal Internship I: Intercultural Competence in Japanese Society”（「グローカル・インターンシップ Ⅰ：日本社会における異文化間能力」）、“Glocal Internship II: Intercultural Practicum to Work with Local Japan” （「グローカルインターンシップ II: 日本の地域社会と協働する異文化間実習」として、内容を刷新し授業を開講した。I の授業を英語で開講することで、異文化間能力・異文化間コミュニケーションの理論や日本文化・日本社会に関する知識習得と実践を英語で希望する日本語初級・中級の留学生も受講可能とした。カルチャーショック・逆カルチャーショック、留学生における適応と再適応、協働学習と体験学習、日本社会における文化的価値観、異文化コミュニケーション、ダイバーシティとインクルージョンなどの内容を網羅するとともに、地域学校における実践や地域行政と関われる場も盛り込んだ。本授業で重要視した 1 点目は、多国籍の留学生間でのチームワーク構築である。グループワークや他の受講者とコミュニケーションをするワークをほぼ毎週行い、学生間のラポールを形成した。これらは、グループプロジェクトにお

いて学生間の協力を促し、ダイバーシティの力を最大限に引き出すことにつながる。さらに、多国籍留学生の協力による力は日本の地域社会とつながる場でも大きな力を発揮する。

重要視した点の第 2 点目は、異文化間理解・異文化間コミュニケーション・日本文化に関する理論的理解を、留学生が実際に日本の学校・行政と関わりつつ実践してみる体験を作ることである。体験学習の場として、地域学校との国際教育交流（10 月）、地域行政との多文化共生社会を目指す公開国際セミナー（11 月）、広島大学公開講座（12 月）の場を設定した。第 1 回目の実践の広島県立日彰館高等学校との国際教育交流では、高校を訪問し、異文化間接触を自ら起こすプロジェクトを実践した（詳細は「留学生と地域学校との国際教育交流」を参照）。「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」というテーマで、4~5 人の３グループが、各教室でプロジェクトを実践し、高校生とインタラクションを起こす実践を行った。授業では、そのためのリハーサルを数回実施し、教員からのフィードバックをもとに、綿密に内容を練り、改善を重ねていった。

2022 年 11 月には、呉市行政の協力を得て「地域と大学が協働で創る多文化共生社会」地域公開国際セミナーを対面で開催した。第 2 回目の実践である。呉市行政関係者（呉市観光振興課及び呉市議会議員）を招聘し、「世界に向けた観光振興の課題」と題して講義をいただき、留学生と地域関係者とで、地域の観光を世界に開く施策について議論した。「日本の地域の魅力を留学生に伝える方策―外国人が魅力を感じる企画の提案：留学生の視点から」と題した留学生のプレゼンテーションでは、外国人から見た日本観光に対する新しい視点が提供され、双方にとり意義ある意見交換の場となった。これらの体験は、留学生が、地域社会の人々と人として関わり、自身の日本文化に関する知識が、現実的な人との関りにおいてどう生かされるのかを実体験する貴重な場である。地域社会における重

要課題をテーマとして設定することにより、留学生と行政の双方にとり相互支援となる意義ある意見交換の場を構築できる。「グローカルインターンシップ II」の授業では、名刺交換・自己紹介・挨拶・電話応対などより実践を重視した。受講生は名刺を作成し、公開セミナーで名刺交換を実践した。名刺交換の体験は、ビジネスの現場での礼儀を実体験する貴重な体験である。

第 3 回目の実践は、2022 年 12 月に開催した「広島大学公開講座」である。公開講座の参加者と合同で参加し、異文化コミュニケーション、カルチャーショック、異文化間リテラシー、文化の構成要素、文化の次元などの講義を受けた。ここでもラポール形成となるグループワークなどを導入して留学生と市民がお互いを知り交流できる内容にした。異文化について実体験を交えて共に考えたり、日本社会で驚いたことなどをグループで対話する場を設けた。さらに、3 分の短いグループ・プレゼンテーションとして、「日本でびっくりしたこと―留学生の知りたい日本文化」と題して、3 つのグループが自身の日本での体験を参加者と共有した。

◆ 地域高校における「異文化間理解能力育成研修」

2022 年第 2 タームに新しく“Intercultural Competence and Japanese Society”（「異文化間能力と日本社会」）と題した授業を英語で開講した。本授業では、異文化間理解に関する理論を学びつつ、留学生が日本の地域社会（学校・行政・企業）と関わり、日本社会における異文化間能力について実践を通して学ぶ授業である。2022 年 7 月に広島県立広高校において「異文化間能力育成研修」を実施した。フランス、イギリス、アメリカ、タイ、中国、日本出身の広島大学学生 10 名が参加した。そのうち 1 人はオンラインで参加した。「異文化間理解の社会理論と実践」（大学院）の受講生も合同フィールドワークとして参加した。高校生約 200 人が参加する大規模な研修となった。対面で開催したが、大学院生の一人がオンラインで参加したことからハイブリッド形式となった。学校の現場での大学教員（筆者）の目線からの風景をオンライン参加の学生に伝えるため、高校教員の一人が絶えず筆者について回りカメラ撮影をした。

内容は、3 部から構成され、第 1 部を全体会、第 2 部を各クラスでの広島大学学生のプレゼンテーションとした。第 1 部の全体会では、全体をつなぎ、イギリスとアメリカ出身

の学生が、自己紹介と自国の大学紹介のスピーチを行い、各クラスにも配信した。次に、**第 2 部では、第 1 ラウンドと第 2 ラウンドを設定してプレゼンテーションを行った。**第 1 ラウンドでは、“Intercultural Competence and Japanese Society”受講生は、「留学生と日本の地域高校生がつながる場づくりの提案」、「異文化間理解の社会理論と実践」を受講している大学院生は、「広島大学への提案：異文化間理解を促進する施策」をテーマとしてプレゼンテーションを行った。さらに、筆者による「大学の英語による講義体験」を盛り込み、異文化間理解についての短い講義を英語で実施した。第 2 ラウンドでは、教室を移動し、同様のプレゼンテーションを実施した。最後に 15 分の短いセッションを設け、研究プロジェクトに取り組んでいる高校 2 年生が、研究に関する質問を留学生に英語で行い、その質疑応答を筆者が英語と日本語で通訳した。**第 3 部はホームルームと掃除の見学、茶道部の茶会見学、和紙を使用した箸入れの作成を高校生と行った。**最後に体育館で剣道部の練習を見学した。

◆　留学生と地域学校との国際教育交流

HUSA プログラム留学生は、2014 年度より、広島県立日彰館高等学校による「日彰館高校グローカル人材育成プログラム」の一環として開催される「おもてなしホームステイ」に参加してきた。その一環として、おもてなしプラン「国際交流行事」を 2015 年度より筆者が企画し、留学生によるスピーチ発表や高校生・教職員・留学生の全員が参加する異文化インタラクションの場を構築してきた。

2020 年度は、新型コロナウイルス感染症(Covid-19)によりオンラインで開催することとなった。地域中学校・小学校や地域住民からも参加を得て、200 名を超える国際交流会を

11 月 20 日にオンラインで開催し、筆者の授業（“Japanese Society and Gender Issues”と“Glocal Internship”）の授業の受講者が参加した。2021 年度も、引き続き授業の一環としてオンラインで国際交流会を 11 月 4 日に開催した。広島大学学生 22 名、日彰館高等学校生徒 178 名、吉舎中学校 1 年生 22 名、吉舎小学校 6 年生 16 名など、参加者は 200 名を超えた。「おもてなしタイム」では、書道・剣道の日本文化紹介、中学校の平和学習発表、地域紹介、ホストファミリーの挨拶があった。留学生からは英語と日本語による自己紹介のスピーチを行った。イギリス・フランス・アメリカ・メキシコ・ロシア・中国・香港・タイ・バングラデシュ・日本からの参加者がオンラインでつながる体験となった。

2022 年度は、3 年ぶりに対面で開催した。筆者の授業“Glocal Internship”（「グローカル・インターンシップ」）と“Japanese Society and Gender Issues”（「日本社会とジェンダー」）の受講生がフィールドワークとして日彰館高校における授業と国際教育交流に参加した。イギリス・フィンランド・アメリカ・スペイン・ドイツ・中国・台湾・香港・韓国・日本からの交換留学生が参加した。留学生を含む広島大学学生 36 名、日彰館高等学校生徒 147 名、三次市吉舎中学校 1 年生 9 名、広島県三次市立吉舎中学校長、同窓会事務局長（ホストファミリー経験者）、教職員 17 名の計 211 名が参加した。さらに、53 名の生徒が、安全の観点から学校内でオンラインにより全体会と吉舎街歩きガイドツアーに参加した。

2022 年度は、「全体会」・「クラス交流」・「街歩きガイドツアー」の 3 部構成で実施した。筆者は、全体会とクラス交流の部分において、大学の授業と高校における国際教育交流とを連携させ、双方の異文化間能力を引き出し延ばす教育の場を構築することを試みた。サードカルチャーを作り出すことで、交換留学生・広島大学学生・高校生の異文化間インタラクションを引き起こす実践を行ってきた。

まず全体会では、留学生のスピーチと自己紹介を行った。引き続き、グループ・アクティビティのセッションでは、留学生２～３人と高校生６～７人のグループ内での自己紹介、留学生・高校生の相互からの質問、絵カードを使用したクイズ、高校生からのクイズを行った。グループで内部でのインタラクションを全体に反映できるよう司会進行し、英語と日本語を使用することで、全体で理解しつつ進められるようにした。クラス交流では、1 年生・2 年生・3 年生の各 2 クラスの 6 クラスにおいて、“Glocal Internship”（「グローカル・インターンシップ」）授業の 3 グループと“Japanese Society and Gender Issues”（「日本社会とジェンダー」）の 5 グループが、アクティビティまたはディスカッションを行った。第 1 ラウンドと第 2 ラウンドでクラスを移動することで 2 つの異なるクラスの生徒と協同学習を行った。「グローカル・インターンシップ」受講生は、「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」を考案し、アクティビティやゲームを行った。「日本社会とジェンダー」の受講生が参加したクラスでは、留学生と高校生の双方がジェンダ

ーに関する質問をし合った。街歩きガイドツアーでは、留学生と高校生 4～5 人のグループを作り、高校周辺を一緒に歩き、高校生が地域の歴史や文化を留学生に伝える試みを行った。この体験について、留学生は、自由な雰囲気の中で高校生と一緒に街を歩き、コミュニケーションを楽しみながら親交を深める体験として高く評価するとともに、双方に大切な思い出となっている。

◆　広島大学公開講座

2017 年度より、広島大学公開講座「グローバル社会・大学・地域を結ぶ～異文化との接触に備えて～」を開講してきた。留学生にも参加を促し、英語・日本語を使用して世界各国からの留学生の意見も聞きながら地域の人々とのインタラクションを起こす形式で実施してきた。新型コロナウイルス感染症(Covid-19)により対面での開催が困難であったため、2021 年度は 6 月 16 日・23 日にオンラインで実施した。広島大学短期交換留学プログラム（HUSA）留学生と「異文化間理解の社会理論と実践」を受講している大学院生が参加した。HUSA プログラムからは、イギリスのカーディフ大学出身の留学生とアメリカ在住の USAC（University Studies Abroad Consortium）留学生が参加した。コロナ禍での異文化体験や異文化間での礼儀の相違に関する見解など、留学生の貴重な体験を参加者と共有することができた。オンラインの公開講座には全国から様々な異文化体験を持つ方々の参加があった。日本留学に関する留学生の声を聞きつつ、異文化間コミュニケーションやカルチャーショックについて相互の体験を共有し共に考える場となった。

2022 年度は、12 月に広島大学ミライクリエにて対面で実施した。“Glocal Internship I: Intercultural Competence in Japanese Society”（「グローカル・インターンシップ I：日本社会における異文化間能力」）、“Glocal Internship II: Intercultural Practicum to Work with Local Japan”（「グローカル・インターンシップ II: 日本の地域社会と協働する異文化間実習」）の授業の受講生と公開講座を同時に実施することで、留学生と地域の人々が共修できる場を構築した。第 1 回は「異文化との接触：カルチャーショック」、第 2 回は「異文化コミュニケーション：文化の構成要素」と題して行った。また、公開講座において、留学生が「日本でびっくりしたこと―留学生の知りたい日本文化」 と題したショート・プレゼンテーションを行い、日本での実体験を伝えた。2021 年度より、英語・日本語使用で公開講座

を開講し、より幅広い市民の参加を目指すとともに、地域社会と留学生をつなぐ場を発展させている。

総括

留学生に向けて実施する日本事情教育及び地域と連携した国際的体験学習・国際教育は、毎年進化をとげている。対面・オンライン・ハイブリッドによる教育方式を、コロナ禍への対応という枠を超え、日本と世界とをつなぐ国際教育の場を拡大し教育効果を高める目的で様々に活用している。国際共修の場は、日本在住の留学生・海外在住の留学生・留学生 OB・日本出身の学生・地域の高校生・地域の人々が共に参加する場として拡大している。留学生は、日本文化と日本社会への強い興味と将来的な日本とのつながりを求めて日本に留学する。留学生と広島大学の学生及び地域社会・地域学校と関わる経験は、日本語を話し、日本の人々と実際に人として関わり、日本を実体験する貴重な体験である。「人」とつながる体験学習には新しい発見も多く、留学生は自ら考え動く主体として関わる体験から学び、日々刺激を受け、自ら新しい目標を作り出している。

JOP プログラム（日本語･日本文化オンライン･プログラム）

荒見泰史・迫田久美子・陳斐寧

〈プログラム概要〉

日本語･日本文化プログラム（以下、本プログラム）は、本学と大学間交流協定又は部局間交流協定を締結している中華人民共和国の大学に在学する学部学生に、日本語･日本文化教育をオンライン（同時双方向型）により実施することを通じ、当該学生の日本語能力及び日本文化に対する知識を深め、日本へ留学できるレベルに日本語スキルを向上させるためのプログラムである。具体的には、日本語能力試験(JLPT)N4、N3 レベル相当の日本語能力を N2 レベル以上に引き上げることを目標とする。

〈出願資格〉

以下の(1)及び(2)に該当する者。

(1) 本学と大学間交流協定又は部局間交流協定を締結している中国の大学に在学し、中国に在住している学部学生。

(2) 広島大学森戸国際高等教育学院のオンライン･プレースメントテスト(日本語能力試験（JLPT）N4 以上の日本語能力があるかを測定するためのオンライン試験）を受験していること。

〈選抜方法〉

書類審査、オンライン・プレースメントテストにより総合的に判断し、合格者を決定する。

〈実施期間〉

2022 年 10 月～2022 年 11 月（標記はすべて日本時間）

オンライン初級日本語Ａ（月・火／19:00-20:30）

オンライン初級日本語Ｂ（水・木／19:00-20:30）

東アジア文化の世界Ａ　（オンデマンド講義）

2022 年 12 月～2023 年 3 月

オンライン中級日本語Ａ（月・火／19:00-20:30）

オンライン中級日本語Ｂ（水・木／19:00-20:30）

東アジア文化の世界Ｂ（オンデマンド講義

2023 年 4～2023 年 6 月

オンライン中上級日本語Ａ（月・火／19:00-20:30）

オンライン中上級日本語Ｂ（水・木／19:00-20:30）

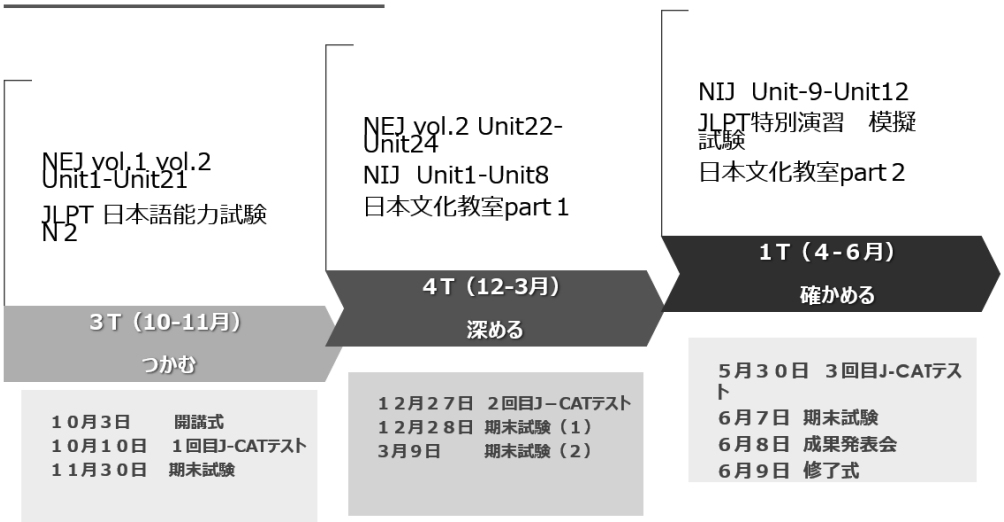
入学後は、毎週月～木曜日 19：00-20:30 に日本語授業 6 科目、オンデマンドで日本文化に関する授業 2 科目の合計 8 科目を受講する。

〈履修科目〉

プログラムで履修する授業科目：本プログラムを受講する学生は、広島大学特別聴講学生として、以下の授業科目を全て履修する。＊修了要件単位数：14 単位 ＊修了者には広島大学特別聴講学生としての学業成績証明書を発行し、「日本語・日本文化オンライン・プログラム（日语・日本文化网络课程）修了証書」を授与する。

科目区分	授業科目	単位数	履修期（日本時間）	履修区分
日本語科目	オンライン初級日本語Ａ	2	2021 年度第 4 ターム（月曜、火曜／19:00-20:30）	必修
	オンライン初級日本語Ｂ	2	2021 年度第 4 ターム（水曜、木曜／19:00-20:30）	
	オンライン中級日本語Ａ	2	2022 年度第 1 ターム（月曜、火曜／19:00-20:30）	
	オンライン中級日本語Ｂ	2	2022 年度第 1 ターム（水曜、木曜／19:00-20:30）	
	オンライン中上級日本語Ａ	2	2022 年度第 2 ターム（月曜、火曜／19:00-20:30）	
	オンライン中上級日本語Ｂ	2	2022 年度第 2 ターム（水曜、木曜／19:00-20:30）	
日本文化科目	東アジア文化の世界Ａ	1	2021 年度第 4 ターム（集中）	必修
	東アジア文化の世界Ｂ	1	2022 年度第 1 ターム（集中）	

〈年間授業の流れ〉



〈指導方針〉

本プログラムの目的は、学生に日本語・日本文化教育を行うことにより、当該学生の日本語能力及び日本文化に対する教養を深め、および日本への留学、JLPT 日本語能力試験 N2 レベル合格を目指すことである。指導の方針としては、授業の前半では基礎学力の養成を最重要課題とする。後半では、実践的な能力を重視し、テーマについて発表・議論を行える自由な日本語表現能力の育成を目指してトレーニングを行う。さらに、年間を通じてシャドーイングトレーニング・日本文化科目および JLPT 日本語能力試験Ｎ２レベルの問題に関するトレーニングを実施する。

〈受け入れ学生概要〉

第 2 期(2022 年 10 月—2023 年 6 月) ６名

学生１	湖南大学	学生４	大連大学
学生２	燕山大学	学生５	首都師範大学
学生３	燕山大学	学生６	首都師範大学

〈講師一覧〉（五十音順）

（１）日本語・日本文化

専任　荒見泰史、迫田久美子、陳斐寧

非常勤　徐婕、野地知子

（２）東アジア文化の世界（五十音順）

阿部泰郎(名古屋大学名誉教授)「東アジア宗教テクスト往還が生み出す文化遺産(一)(二)」

荒見泰史（広島大学教授）「敦煌変文から白話小説へ」、「敦煌讲唱文学写本--动态与静态之间（一）（二）」
近本謙介（名古屋大学教授）「仏教伝来の道 －『玄奘三蔵絵』の構造と構想 －」
白須淨眞（元広島大学准教授）「21 世紀の日本のアジア広域調査活動」
松尾恒一(国立歴史民俗博物館教授）「明清代、東シナ海・南シナ海をめぐる海盗の活動と記憶（一）（二）」、「中国仏教の東漸１中国仏教の日本への伝来」、「中国仏教の東漸２中国仏教の日本への伝来_唐宋代密教と浄土信仰の拡大」
柳瀬善治（広島大学准教授）「日本近代文学史（一）」
吉田一彦（名古屋市立大学名誉教授）「日本における仏法の受容と展開」、「仏法と神信仰の融合」
以上の授業はすべて日本語で行われたが、中国語訳がつけられている。

〈学習カウンセリング制度〉

本プログラムでは次の二つの特有な取組みを行い、 学生一人ひとりの学びを支援する。
１．毎週１回、自主学習のサポート（オフィスアワー）日常の授業や試験の結果を見ながら、日本語能力の技能別(語彙・文法・読解・聴解など)の学習計画を検討したり、弱点克服の学習法を考えたりすることで、主任教員から学生一人ひとりが適切な学習指導を受けることができる。また、学生たちの質問、シャドーイングの確認練習、学習の相談など、学生たちのニーズに応じた助言を行う時間として設定している。
２.広島大学の日本人学生がチューターとして、本プログラムの受講生一人ひとりをサポートする。チューターは、１週間に２回、担当の受講生と 30 分程度の日本語の会話練習を行い、日本語の質問を受けるなどし、さらにテーマを決めて日本と中国の違いについてお互いに日本語でのコミュニケーションを行うことで日本語能力の向上をはかる。

〈テストと評価〉

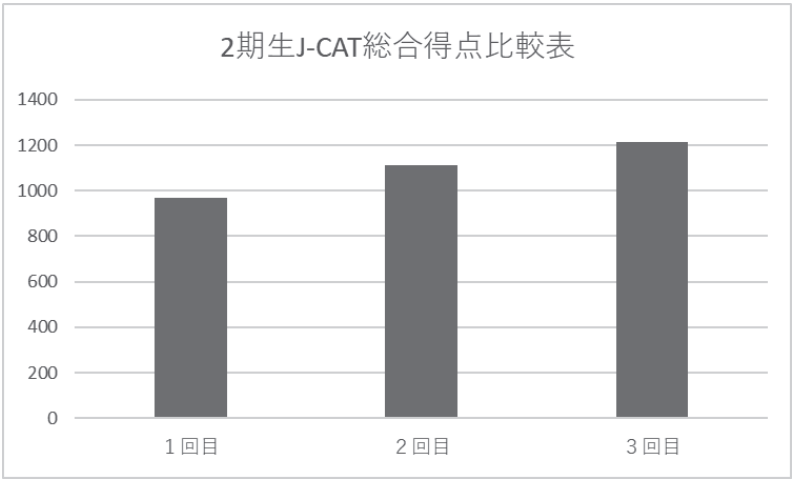
（１）タームテスト
第１ターム・第２ターム・第３ターム終了の時点で期末テストを行う。
（２）J-CAT テスト
８か月間に３回、J-CAT テストを実施する。

〈具体的な成果〉

（１）日本語能力の向上

本プログラムでは、日本語能力の向上を測定するために、オンラインによる日本語テスト「J-CAT（https://j-cat.jalesa.org)」を受験した。１回目 2022 年 10 月 10 日、２回目 2022 年 12 月 27 日、３回目 2023 年 5 月 30 日に計３回実施し、J-CAT のスコアについて個

人差はあるものの、以下の統計表から２期生全員の日本語の学習達成度が着実に向上していることが判断できる。



特に修了前の３回目のスコアでは、全員 200 点より以上の得点を取得しており、目標を達成したと考えられる。プログラム修了後、JLPT 日本語能力試験Ｎ１に高得点で合格した学生がいることも特筆すべきであろう。

（２）本学への留学について

本プログラムの２期生の学生６名のうち、１名が日本への留学を決定し、その他の学生たちも今年の応募に向けて準備を重ねており、将来本学への留学を希望する学生も見られる。

本学と大学間交流協定又は部局間交流協定を締結している中華人民共和国の大学に在学する学部学生に対し、オンラインで広島大学の授業を提供するという事業は本学初めての試みとなる。今回は第２期事業にあたるが本事業は無事終了した。

授業を提供してくださった学内・学外の教員の皆様、本プログラムを多方面から支えてくださった職員の皆さまに深く感謝申し上げる。

最後に２期生修了発表会において、おのおの作った俳句をご紹介することでまとめにかえたい。

満開の桜の下を一歩踏む

桜が満開の時期、それは四月、日本の大学の新学期が始まる時期です。私にとって、日本への留学を選ぶことは、人生において大きな転機でした。再来年の四月に、日本の大学院に無事進学できることを願っています。日本語を勉強し始めた「つぼみ」の状態から桜の国、日本の大学院に進学できる「満開」へと努力しています。

今もこれからも「満開」の心意気で頑張ります。日本の大学のキャンパスの前で、満開の桜の下で、人生の転機の最初の一歩を踏み出します。

卒業は風待月にさようなら

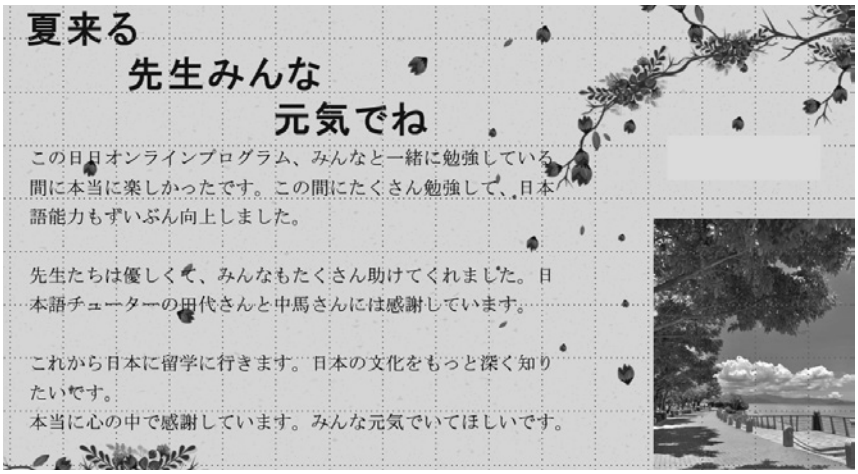
今、中国は卒業の時です。毎晩、四年生たちは寮の外で、いらなくなった教科書などを売っています。今、2年生の私はただ「風待月」をゆっくり過ごしています。先輩達の自分の思い出に関するものを売る姿を見ると、卒業の時私はどうすればいいのかと思わず考えました。そんな今、私もJOP（日本語・日本文化プログラム）から卒業します。JOPの卒業から2年後の大学の卒業を想像し、終わりの寂しさを表しました。

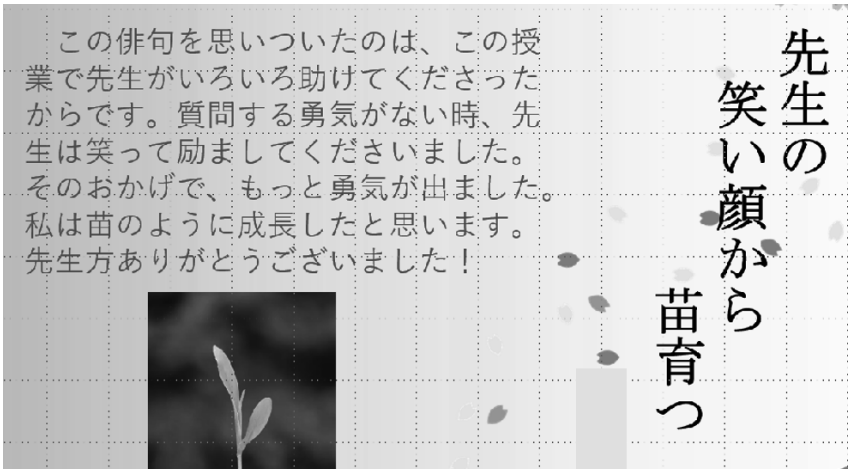
風待月…旧暦6月の異称。

蒸し暑い日が続き、かすかな風にも敏感になっていたことがうかがえる命名である。

蝉しぐれ思い出になるこの季節

夏が来て、JOPプロジェクトが終わろうとしています。
長かったような、短かったような1年でした。
この1年を振り返ると、毎日が感動的です。先生方の優しい声、クラスの仲間の元気な姿、美しい日本語、どれをとっても幸せな気持ちにさせてくれました。
みんな明らかに進歩しました。
たった一年だけど、
この一年の毎日は一生忘れません。





なお、募集要項等については森戸学院のホームページを参照のこと。

https://www.hiroshima-u.ac.jp/international_center/study_at_hu/jop_guide

日本語・日本文化特別研修プログラム

小宮山道夫

本プログラムは、母語に漢字を使用する国及び地域にあたる漢字圏と、それ以外の非漢字圏の大学で日本について学んでいる学生を 2 週間本学に受入れ、研修生が、日本語・日本文化の講義、実習・体験、学生交流によって、日本についての理解・関心を深め、帰国後さらに勉強を続けた後、本学へ再び留学し、日中及び日台間そして日本と諸外国との交流に貢献できる人材として成長することを支援することを目的として 2010 年度夏から実施してきたものである。

2022(令和 4)年度は、夏期は昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策のため、中華人民共和国、台湾、非漢字圏の３プログラムをオンラインで実施した。冬期については、政府の感染症対策の転換や広島空港からの台湾直行便が 2023 年 1 月 4 日に復活したことを受け、台湾と非漢字圏については対面で、直行便が再開されていない中華人民共和国は引き続きオンラインで実施した。

夏期	（台湾）	6 月 27 日(月)～7 月 8 日(金)（10 日間）	8 名	（オンライン）
	（中国）	7 月 11 日(月)～7 月 22 日(金)（10 日間）	169 名	（オンライン）
	（非漢字圏）	7 月 25 日(月)～8 月 5 日(金)(10 日間)	5 名	（オンライン）
冬期	（非漢字圏）	1 月 10 日(火)～1 月 25 日(水)（16 日間）	10 名	（対面）
	（台湾）	1 月 28 日(土)～2 月 12 日(日)（16 日間）	36 名	（対面）
	（中国）	2 月 13 日(月)～2 月 22 日(水)（10 日間）	137 名	（オンライン）

年間の参加者総数は 365 名であった。非漢字圏の国別内訳は夏期がベトナム社会主義共和国 1 名、リトアニア 1 名、インドネシア共和国 3 名、冬期がインドネシア共和国 7 名、リトアニア 3 名であった。冬期の台湾は台湾直通便の復活と対面研修の復活、そして森戸国際高等教育学院所属で台湾に強いパイプのある教員の宣伝効果もあって、定員 30 名を大幅に超える応募者があった。コロナ禍以前であれば無理を押してでも応募者全員の期待に応える体制を組んで受け入れるところであったが、感染症対策の面でも対応する教職員の人員の面でも受け入れは困難であったため、本研修では史上初めて派遣元大学に人数制限をお願いすることとなった。参加を希望していた学生たちの期待に応えられなかった点は大変残念であり、せっかく推薦いただいた派遣元大学の指導教員の皆様にはこの場を借りて改めてお詫び申し上げる。以下、今年度特有の事情と新たな取り組みを中心に述べることとする。

⑴実施時期

オンラインプログラムは一昨年以来平日 10 日間の日程が定着している。夏期の実施時期については、お盆までに３コースを組むという前提のもと、6 月 27 日から 8 月 5 日までの３コース連続の日程が決定した。冬期については春節（旧正月）が 1 月 22 日（日)と近年では最も早い時期にあたっていた。春節休暇は 1 月 20 日から 1 月 29 日までとなったため、昨年と同様に中国と台湾を春節後に実施することとした。非漢字圏は日程の都合上、旧正月と重なることとなるが、昨年度確認したとおり、ウクライナやインドネシアの一部の大学では１月中に休暇が終わることもあり、１月中に実施することに落ち着いた。

残るはオンラインを継続するか対面を実施するかのみの判断となった。そうするうちに、9 月 26 日に政府がオミクロン株の感染が拡大するなか医療機関の負担を軽減して高齢者ほか重症化リスクの高い人に重点的に医療を提供することができるようにすることを目的として感染者の全数把握を簡略化する措置をとった。すなわち今後は新たな行動制限を行わず、感染拡大防止と社会経済活動の両立を図るとの方針に転換したことを受け、対面実施を前提で計画を練り始めた。これ以降、広島空港の WEB 更新を日々注視していたところ、台湾便が 2023(令和 5)年 1 月 4 日に復活（以前の毎日運行ではなく週 4 便の運行。広島発便は 1 月 5 日から再開。）するとの朗報が 10 月 13 日の広島空港 WEB に掲載されたことを受けて、台湾と非漢字圏とを対面で実施することを確定した。中国については空港と航空会社両方に確認したが、復活の見通しは立っていないとの回答であったため、中国のみをオンラインで実施することとした。

⑵実施環境

夏期のオンライン研修は昨年度に続き森戸国際高等教育学院内の教室や研究室で運営することができたが、冬期は対面となるため教室の確保が課題となった。森戸国際高等教育学院創設以前は担当事務が大学本部棟内の国際室だったため、本部棟に近い理学部の教室を中心に空き教室を予約して日々転々と教室を変えて実施する形態であった。森戸国際高等教育学院以降は担当事務が学生プラザと森戸事務室との分担となり、森戸に隣接する教育学部の教室を中心に空き教室を予約して、それまでと同様、教室を転々と変えて実施してきた。このようにコロナ禍以前は研修生の参加者数に応じて臨機応変に教室を確保してきたが、コロナ禍を経験した講師たちの教材の ICT 化が進むと、それを保障する環境をもつ空き教室を授業期間中に確保することは難しくなった。森戸の教室も常に足りない状態であり、研修生を集めてもそれを実施できない懸念が生じた。そうしたところ、ちょうど森戸国際に近い全学の弾力的運用スペース１室（K313）が空いていることに本田義央教授が気付き、1 月から年度末までの 3 ヶ月間を月額１万 5 千円で借用することができた。弾力的運用スペースとは、各部局等に生じている遊休スペースを供出させ、大学本部が管理

してスペースの必要な組織に有償供与する仕組みで、そのスペースはかつて教育学部が供出したスペースであった。ちょうど冬期の最初に始まる非漢字圏の人数に頃合いのスペースであり、ICT 機材の設置や教室準備をその都度構築する必要の無い固定した空間を、それも機材の搬出元である森戸事務室に近く平行移動で済む場所に得たことは、何にも増して効率的で理想的であった。台湾についてはスペースの収容可能能力を超える研修生数だったため、学生プラザ 1 階のフリースペースをパーティションで区切って実施することになったが、拠点を K313 とし、中国のオンライン研修においても配信拠点として活用した。K313 はその後、公募による令和 5(2023)年度以降の使用者選定がなされ、森戸国際としても応募したが、残念ながら教育学部が指名を受けた。本来は 3 月末まで森戸国際に使用権があったが、選定された教育学部が 4 月から活用のため事前に施設整備工事をしたいとの申し入れがあったため、森戸国際の借用契約を 2 月いっぱいで打ち切ることで早々に明け渡すこととした。

ところで台湾コースでは京都歴史文化研修が復活することとなるが、宿所と立命館大学の協力が得られるかどうかが気がかりであった。コロナ以前に宿泊で利用させて頂いてきた立命館大学衣笠セミナーハウスは残念ながら感染症対策のため学外の利用を停止しているとのことで、他の手段を考えねばならないことが分かった。しかしながら立命館大学教員による京都学関連講義の提供や、小型バスの入構駐車、立命館学生との夕食をとりながらの交流や朝食の買い置きなど、宿泊以外の協力については最大限のご尽力を頂くことができた。それもコロナ前の立命館の担当者が異動してしまっている上、大学の入試日程に重なっているにもかかわらず、異例ともいえる対応を頂くことができた。ここに改めて記して心よりの感謝とお礼を申し上げたい。その他、和菓子体験を提供してくださっていた甘春堂東店や、華道体験を提供してくださっていた池坊華道会もコロナ前と同様に快く研修を受け入れてくださったことに感謝申し上げたい。

学外研修としては他に東広島市歴史文化研修、広島市歴史文化平和研修、そして宮島・錦帯橋歴史文化研修があり、非漢字圏については宮島・錦帯橋歴史文化研修に代えて世界遺産宮島歴史文化研修、京都研修に代えて瀬戸内海国立公園歴史文化研修（鞆の浦）があったが、いずれもコロナ前と同等の施設見学や体験を組むことができた。これら全体を通じ対面研修の復活を実感して感慨も一入であった。

⑶管理運営体制

2019 年 10 月から当研修に関わりはじめ、2020 年 4 月から前任者にかわり当研修の担当事務を支えてくれてきた非常勤職員が 2022 年 6 月いっぱいで交代することとなり、7 月から派遣職員が着任した。コロナ禍だったため以前の対面での研修に比べ格段に事務業務は軽減されていたとはいえ、新任者は準備期間もなく台湾研修の途中から関わることと

なり、慣れない業務に苦労せざるをえなかった。すでに研修が始まっているためレクチャーや十分な打合せをする時間も無く、業務の引き継ぎがなされている前提で協働していく他はなかった。そしてそもそも担当教員たちもコロナ前の経験の細部を忘れてしまっていた。このため担当する教職員間の連携不足が所々生じ、講義を提供してくださった講師に困惑を与えることがあったことを申し訳なく思っている。特に冬期には講師が来ず急遽プログラム内容を変更する必要が生じたことで研修生たちにも不利益を与えてしまったことをお詫びしたい。夏と冬の研修でようやく経験を積んだ契約職員は残念ながら契約終了となった。来年度はまた新たな契約職員により管理運営体制を組まねばならない点は不安でならない。更に 2018 年 10 月の森戸国際高等教育学院創設以来担当となっていた事務の責任者にあたる常勤職員も 2022 年度末で異動となり、コロナ前の対面研修の現場を知る事務職員はいなくなった。この間、グローバル化推進会議グローバル化推進部会のタスク担当委員も業務見直しによる担当変更のため交代となるなど、変動が激しい。管理運営に関しては年々環境が劣化しており、特別研修プログラムの存続については懸念しか無い。

⑷社会連携科目「国際交流スキルアップ演習」

学生交流に参加する学生たちの教育効果とモチベーションを高めることと学生数を拡大する意味を含め、「広島大学で組織的に行われる国際ボランティア活動（日本語・日本文化特別研修の補助業務など）に参加し、教員指導の下で行われる様々な行事（学外研修活動、言語教育活動）の補助を行いつつ、大学の国際交流、学生交流に関するスキルを身につける」ことを目標として昨年度創設した正規授業、教養教育社会連携科目「国際交流スキルアップ演習」（主担当教員荒見泰史、副担当教員小宮山道夫）を本研修と連動させて前期・後期の集中科目として実施した。前期は受講者 13 名のうち本研修参加者が 3 名、後期は同様に 12 名のうち 3 名が登録し単位を認定した。後期についてはそれまでのオンラインでの交流とは異なり、対面での交流となったため、学生たちの充実感が格段に高まる一方で準備や実際の交流の運営など慣れない接触が生じストレスを感じる部分も多くあったようである。若者たちにとってコロナ禍が対人関係における深い爪痕を残している点は長期的に見て気がかりではある。

研究・その他の活動（2022 年 4 月～2023 年 3 月）

１．研究論文・著書・研究ノート

小宮山道夫「加能越三州の学生寄宿舎「久徴館」およびその同窓会組織に関する考察」，『地方教育史研究』43，2022 年 5 月，pp.1-26（査読あり）

Komiyama, Michio，“Reading and Deciphering the Problems of Modern Japanese Youth from Hojo Tokiyuki's Lecture "The Scholar activity of Shin-Doku”，『Hiroshima interdisciplinary studies in the humanities』18，March 31, 2023，pp.69-79

Sakoda, Kumiko and Kawaguchi, Satomi. “Japanese L2 Corpora and SLA research.”, In S. Kawaguchi, B. Biase and Y. Yamaguchi (Eds.) *Processability and Language Acquisition in the Asia-Pacific Region*, John Benjamins Publishing Company, Feb 2, 2023, pp.144-162

Takita, Fuyuko. “A Case Study: Cultivating Global Mindset through a Cross Cultural Negotiation Course” Using an Online Negotiation Exercise (Online Negotiation Exercise with Students from Holland and Denmark” A Case Study Research Report, JAGCE (The Japan Association for Global Competency Education” Conference Newsletter 33 グローバル人材育成教育学会（人間環境大学キャンパス）The 10th National Conference and 3rd International WEB Conference October 21st, 2022

恒松直美「留学生と地域高校生の異文化間能力育成における異文化間インタラクション―「関り」が生まれる空間とその文化継承―」, 広島県立日彰館高等学校『研究紀要』, 20 号, 2023, pp. 43-50

名塩征史 「日本語会話における「いや」についての一考察：認識的優位性の主張との関連」, 『広島大学留学生教育』, 26 号, 2022, pp. 19-32

名塩征史 「日常会話を伴う理容行為に状況づけられた「見る」□鏡を介して「見る／見せる」システムの分析」, 『言語・コミュニケーション研究の地平 第３巻 外界と対峙する』（ひつじ書房）, 2022, pp. 102-125

名塩征史 「活動を遂行する発話／活動と並行する発話」, 『広島大学森戸国際高等教育学院紀要』, 5 号, 2023, pp. 1-14

フェレイロ・ポッセ、ダマソ　「スペイン語を母語とする日本語学習者の長音に関する一考察―I- JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパスを基に」『大学教育における現在問題（Японский язык в вузе: актуальные проблемы преподавания）　第 24 巻』　4 月 2022 年

フェレイロ・ポッセ、ダマソ　「ＩＣＴツールを活用した国際日本学教育に実践―芥川龍之介「鼻」にみる近代化をテーマにしたＰＢＬ型授業―」『留学生教育　第 26 号』2022 年　（永井敦、松山由布子、フェレイロ・ダマソ、畑有紀）

２．学会発表

田北冬子　“Cross-Cultural Negotiation Course: Incorporating CLIL Principles and Practices”, 日本 CLIL (Content and Language Integrated Learning) 学会（中国支部会）叡啓大学、2022 年 9 月 10 日

田北冬子　“A Case Study: Cultivating Global Mindset through a ‘Cross-Cultural Negotiation Course’ using an Online Negotiation Exercise”, JAGCE (The Japan Association for Global Competency for Education) グローバル人材育成教育学会　人間環境大学松山キャンパス, 2022 年 10 月 21 日

Tsunematsu, Naomi, “Intercultural Challenges of Western Exchange Students in Study Abroad in Japan,” 第 27 回留学生教育学会年次大会（総会・研究大会）, 2022 年 8 月 20 日, オンライン

Tsunematsu, Naomi, “Intercultural Students’ Aspirations and Concerns Before Departure in Study Abroad in Japan,” 第 81 回日本教育学会, 2022 年 8 月 24 日, オンライン

Tsunematsu, Naomi, “Purposes and Aspirations of Western Students for Study Abroad in Japan”, The 14th Asian Conference on Education (ACE 2022), The International Academic Forum (IAFOR), Tokyo, December 2, 2022. Online.

名塩征史　「空手の稽古における『型』を用いた学びの仕組み － 動きの反復と端的な発語 －」, 社会言語科学会第 47 回大会, 東京国際大学, 2023 年 3 月 17 日

Ferreiro Posse Damaso　Spanish Association of Japanese Studies (May, 2022)Análisis de los conceptos de “vida”, “sangre” y “porvenir” en la poesía de Murayama Kaita (The concepts of “life”, “blood” and “future” in Murayama Kaita’s poetry)

Ferreiro Posse Damaso　British Association of Japanese Studies (2022 September 7-9) Iwano Hōmei and the new model of masculinity in Meiji Japan

フェレイロ・ポッセ、ダマソ　2022 年 12 月 11 日学習者コーパス研究会「スペイン語を母語とする日本語学習者の長音問題ーアクセントの干渉？」

フェレイロ・ポッセ、ダマソ　国際日本文化研究センター第 4 期機関拠点型基幹研究プロジェクト『キックオフシンポジウム「日本文明の再構築―岩倉使節団 150 周年に寄せて―」』（2 月 2023 年）「日本文学を題材とするアクティブラーニング：インターネットを活用した国際的な学術コミュニケーション」

３．学術研究補助金

小宮山道夫　科学研究費補助金(C)「近代教育政策における制度構想と地域での受容―広域文教行政と地域実態の相克―」（2019-2023）

小宮山道夫　科学研究費補助金(B)（研究分担者）「1960-70 年代の大学改革－大学紛争と大学改革の国際比較研究（代表：羽田貴史）」（2021-2023）

田北冬子　科学研究費助成事業　（基板研究（C））、Promoting Effective Intercultural Communicative Competence for Japanese University Students in Cross-Cultural Negotiating Settings.　2022-2024 年

名塩征史　科学研究費補助金 基盤研究(C)「武道における指導-学習過程の相互行為分析：実践的技能を伝え合う言語と身体の解明」（2021-2023）

４．その他の活動

A. 地域貢献、社会貢献

小宮山道夫　放送大学客員准教授

小宮山道夫　福山市医師会看護専門学校非常勤講師

小宮山道夫　東広島市史編さん専門部会員

小宮山道夫　広島大学 G.ecbo プログラム運営委員

小宮山道夫　広島大学文書館研究員

小宮山道夫　広島大学スポーツセンター協力研究員

小宮山道夫　広島大学ダイバーシティ＆インクルージョン推進機構研究員

田北冬子　広島県平和推進プロジェクト・グローバル未来塾 in ひろしま
未来塾 in 2022 and 2023 プロジェクト研修講師

田北冬子　広島大学国際交流室国際大学ネットワーク（INU）運営委員

田北冬子　学校法人広島インターナショナルスクール評議員
恒松直美　広島大学附属高等学校スーパーサイエンス・ハイスクール研究協力委員
恒松直美　広島大学　ダイバーシティ研究センター協力教員
恒松直美　多文化共生研究会メンバー
恒松直美　広島県立日彰館高等学校異文化理解教育推進委員
恒松直美　広島大学ダイバーシティ研究センター協力教員
恒松直美　広島大学大学院人間社会科学研究科教育科学専攻教育学プログラム協力教員

B. 学会活動

小宮山道夫　全国地方教育史学会　全国幹事
小宮山道夫　広島医史学研究会　理事
恒松直美　日本総合学術学会　監事
名塩征史　社会言語科学会　企画委員
名塩征史　日本語用論学会　広報委員
名塩征史　対照言語行動学研究会　世話役／事務局

C. 講演・ワークショップ等

小宮山道夫　放送大学広島学習センター公開特別講座「教育の歴史①西洋の教育」2022年5月7日

小宮山道夫　放送大学広島学習センター公開特別講座「教育の歴史②日本東洋の教育」2022年7月2日

小宮山道夫　放送大学広島学習センター公開特別講座「教育の歴史③近・現代の教育」2022年9月17日

小宮山道夫　放送大学広島学習センター公開特別講座「大教育者との対話①古代の大教育者たち」2022年11月19日

小宮山道夫　放送大学広島学習センター公開特別講座「大教育者との対話②中世の大教育者たち」2023年1月7日

小宮山道夫　放送大学広島学習センター公開特別講座「大教育者との対話③近現代の大教育者たち」2023年3月11日

迫田久美子　四国大学学際融合研究所言語文化研究部門特別講演会　日本語教育フォーラム「日本語教師を考える―日本人は日本語が教えられるか―」2023 年 3 月 25 日　対面　四国大学

迫田久美子　東アジア日本研究者協議会 第 6 回国際学術大会　パネル企画「日本におけるポストコロナ時代の日本語教育」2022 年 11 月 5 日　オンライン形式　東アジア日本研究者協議会, 北京外国語大学

迫田久美子　上智大学言語教育研究センター主催 2022 年度 FD 講演会「習得研究から日本語教育へ―誤用分析・コーパス研究・シャドーイングを繋ぐもの―」2023 年 2 月 25 日　対面　上智大学

田北冬子　“Beyond Nation, Culture and Language”（国家、文化と言語を超えて）Keynote Speaker 基調講演, 広島県教育委員会　学びの変革推進部　高校教育指導課（広島 YMCA）　2023 年 1 月 18 日

田北冬子　“Poverty and Hunger towards SDGs (Sustainable Development Goals)”　講義 広島平和推進プロジェクト・グローバル未来塾 in ひろしま, 広島国際プラザ・まちづくり市民交流プラザ　2022 年 10 月 16 日

田北冬子　“Education and Gender Equality towards SDGs (Sustainable Development Goals)” 講義　広島平和推進プロジェクト・グローバル未来塾 in ひろしま, 広島国際プラザ・まちづくり市民交流プラザ　2022 年 8 月 13 日

田北冬子　“Cross-Cultural Communication and Negotiation”　特別講義　国際大学ネットワーク（INU2022）Global Citizenship and Peace　広島大学　2022 年 8 月 8 日

田北冬子　“Understanding Cultural Values and Beliefs”　講義　国際大学ネットワーク（INU2023）広島大学国際室グローバル推進グループ主催 (Part I)　広島大学 2022 年 7 月 15 日

田北冬子　“異文化理解と異文化交渉学”　講義　国際大学ネットワーク（INU2022）広島大学国際室グローバルス推進グループ主催 (Part II)　広島大学 2022 年 7 月 17 日

田北冬子　「異文化交渉学」Cross-Cultural Negotiation 特別招待講演
叡啓大学(叡啓大学市内キャンパス), 2022 年 5 月 26 日

田北冬子　「グローバル社会における異文化コミュニケーション　講義, 2022 年度夏期

広島大学日本語日本文化特別研修（非漢字圏）， 2022 年 8 月 1 日

田北冬子　「グローバル社会における異文化コミュニケーション~言語と文化的価値観の相違点」　講義（オンライン）, 2022 年度冬期　広島大学日本語日本文化特別研修（非漢字圏）， 2023 年 1 月 13 日

恒松直美　「大学国際化・異文化間理解」講義（オンライン），2021 年度夏季広島大学日本語日本文化特別研修（台湾）, 2022 年 7 月 1 日

恒松直美　「大学国際化・異文化間理解」講義（オンライン），2021 年度夏季広島大学日本語日本文化特別研修（中国）, 2022 年 7 月 15 日

恒松直美　「異文化間能力育成研修」，広島県立広高等学校, 2022 年 7 月 27 日

恒松直美　「大学国際化・異文化間理解」講義（オンライン），2022 年度夏季広島大学日本語日本文化特別研修（非漢字圏）, 2022 年 8 月 5 日

恒松直美　「日彰館高等学校と広島大学学生との国際教育交流」（オンライン），広島県立日彰館高等学校「グローカル人材育成プログラム 120　- 吉舎おもてなしプラン」, 2022 年 10 月 29 日

恒松直美 「地域と大学が協働で創る多文化共生社会」地域公開国際セミナー開催（オンライン），「グローカルインターンシップ」, 2022 年 11 月 11 日

Tsunematsu, Naomi, The 14th Asian Conference on Education (ACE 2022), The International Academic Forum (IAFOR), Chair for Friday Live-Stream Session 1: Higher Education, Tokyo, December 2, 2022. Online.

恒松直美　広島大学公開講座「グローバル社会・大学・地域を結ぶ～異文化との接触に備えて～」（英語・日本語, オンライン）, 2022 年 12 月 16 日・12 月 23 日

恒松直美 「留学・カルチャーショック・異文化間理能力」講義（オンライン）, 2022 年度冬季広島大学日本語日本文化特別研修（中国）, 2023 年 2 月 13 日

フェレイロ･ポッセ、ダマソ・畑有紀・松山由布子・李麗・永井敦　第２回 広島大学国際交流を通した日本学セミナー子ども向け雑誌『赤い鳥』を読む PBL セミナー, 2023 年 2 月～３月

D. 研究会などの主催

迫田久美子　第 7 回学習者コーパスワークショップ（CLW7）「コーパスは日本語指導に役立つかーデータ駆動型学習 DDL の活用を考えるー」2022 年 9 月 17 日　オンライン形式

迫田久美子　グローバルネットワーク国際会議　「コーパス（DDL）&IT を利用した日本語教育 ー日本語教育のこれまでとこれからー」2023 年 1 月 21 日オンライン形式